

ハイト・スピーチと隣人愛

奨励	越川 弘英〔こしかわ・ひろひで〕
奨励者紹介	同志社大学キリスト教文化センター副所長 同志社大学キリスト教文化センター教授
研究テーマ	キリスト教の実践神学（礼拝・宣教・牧会）

次の日、一行はカイサリアに到着した。コルネリウスは親類や親しい友人を呼び集めて待っていた。ペトロが来ると、コルネリウスは迎えに出て、足もとにひれ伏して拝んだ。ペトロは彼を起こして言った。「お立ちください。わたしもただの人間です。」そして、話しながら家に入ってみると、大勢の人が集まっていたので、彼らに言った。「あなたがたもご存じのとおり、ユダヤ人が外国人と交際したり、外国人を訪問したりすることは、律法で禁じられています。けれども、神はわたしに、どんな人をも清くない者とか、汚れている者とか言ってはならないと、お示しになりました。」

（使徒言行録 10章24―28節）

「ハイトスピーチ」という言葉

今出川キャンパスを歩いて、あなたが誰かに「死ね」とか「ゴキブリ」とののしられたら、どう感じるでしょう。それも一人ではなく、20人、50人、100人といった大勢の人間が群れをなして、「死ね、死ね」「ゴキブリ、ゴキブリ」と言われ続けたら、どうでしょう。

ご存じかもしれませんが、そうした現実が、今、東京なら新大久保、大阪なら鶴橋といった在韓国・朝鮮人の人びとが多く住む地域で起こっています。

「ハイトスピーチ」という言葉は「憎悪発言」とか「憎悪表現」と訳されていますが、まさに憎しみをむき出しにして、特定の人びとを言葉の暴力で襲うことが、今日の私たちの社会で起こっているのです。そこには、今学期のテーマとしてこのチャペル・アワーで取りあげている「隣人愛」と正反対の極みに立つものがあると言えるでしょう。

私がこの現象に関心をもつようになったのは、しばらく前の新聞に出ていたある記事を目にしてからのことです。それは、在日の朝鮮・韓国人の人びとをターゲットにして、特に今年に入ってから著しく過激な言葉でデモを行うようになった団体に関わっていた人の言動を追ったレポート記事でした。

この人は、勤務先の経験で、海外との取り引きにおいて日本が不当におとしめられているという感じをもつことが多かったそうです。この人がネットで外国人に対して過激な主張を行っている団体を見つけ、初めてそのデモに参加したのが2011年8月だったといいます。それは「韓流ドラマ」を多く放映していたフジテレビに対し、偏向しているという名目で行ったデモでした。こうしたデモに参加することをおして、友人もできるようになったといいます。やがてネットでデモを生中継するというボランティアに熱意を燃やすようになり、頼まれれば全国どこへでも出かけていったそうです。

ところが、昨年の衆議院選挙を経て、今年に入ってから、この人はなぜか「目標を見失った気がした」といいます。その辺にどういう事情があったのか詳しいことは分かりません。少し新聞記事から引用します。

「中継のとき、デモ参加者と通行人との温度差は、前から気になっていた。飲み会で主張と少しでも違うことを言うと、みなすぐに激化した。

でもその『怒り』の根拠って何だろう。『ネットで都合良い情報ばかり集めては、身内でそうさうだと盛り上がっていただけではないか』

立場の異なる人が書いた本を読んでみた。在日韓国・朝鮮人がなぜこの国にいるのか。歴史的経緯を初めて知った。」（『朝日新聞』2013年4月28日付朝刊）

この人はその後、急速に冷めていくというか、こうしたデモ活動から遠ざかっていきます。そして今年3月に、ネット上で次のような「決別宣言」をします。

「殺せ、ゴキブリと言いながらのデモにはもう、賛同できない。スタンスの違う人からは、モンスターに見えるのではないかと」

「怒りを伝えるためにタブーを破るんだという。でもあんな言葉を使わないとできないのか」

この新聞は次のように記事を結んでいます。

「1時間で5471件のコメントが殺到。『お前は在日認定』『氏ね〜〜』

言葉が今度は自分に突き刺さってきた。ただただ、怖かった。」

知らないがゆえに？

誰もが知っているように、私たちの国にはまだいろいろなところでさまざまな差別が存在し、人種や民族、出自や性、思想や信条によって偏見をもたれたり不利な扱いをされかねない現実が残っています。しかし少なくとも公の場では、差別、暴力、行き過ぎた過激な発言といったものは、認められるべきではない・正しいことではないという一定の合意が存在していたように思っていました。

ところが、最近の日本の状況を見ると、こうした合意やルールがあちこちで崩れはじめ、いともたやすくメルトダウンしはじめているような印象を受けます。つい先日の大阪市長の「従軍慰安婦は必要だった」発言もそうですが、言っていないことといえないことがあるという常識が通用しなくなってきている気がします。力のある個人や数を頼んだ集団が、大きな声を挙げ、一方的に発言し、相手を黙らせ、無力感に陥らせ、自分の言いたいことを押しとおしていくという状況は、どうみてもまっとうなことではありません。しかし、どうやらそのまっとうとは思えないことが、私たちの目の前で繰り広げられているのです。

戦後も日本社会には在日韓国・朝鮮人の人びとを対象とする差別が、陰に陽に、さまざまなかたちで存在してきました。しかしたとえ僅かずつであれ、そうした差別は解消する方向に向かってきたと思っていたのですが、時として地中のマグマが突然噴出するようなかたちで、差別、憎しみ、暴力が出現することがあるという事実を、今回の出来事で思い知らされたように感じています。

私が先ほどの記事を読んでいてとりわけ驚かされたのは、少なくともこの人は日本と朝鮮・韓国との間の戦前戦後の歴史的事情をある程度は知ったうえで、それでもハイトスピーチを叫ぶ立場を選んだのだと思っていたのですが、どうやらそうではなかったらしいという点です。日本が朝鮮半島を植民地化した歴史的事実、その植民地化のもとで多くの人が日本に渡ってこざるを得なかった歴史的事実、従軍慰安婦や強制労働といった問題、そして第二次世界大戦とその後の展開のなかで、在日朝鮮・韓国人として生きることを選ばざるを得なかった歴史的事実を知らなかったようなのです。

日本では、中学、高校、そして大学も含めて、近現代の歴史教育がおろそかにされていると指摘されることがあります。そうしたことは今日取りあげているハイトスピーチのような問題と決して無関係ではないと思います。昨今、私たちの学校も含めてグローバル社会に貢献する教育とか世界に通用する人材を育成するといったことが盛んに言われていますが、基本的な歴史や世界の現実を知ることなしに、そのような教育や人間形成ができるはずがありません。私たちのすぐ隣りに現に存在する多様な背景や立場をもった人びととコミュニケーションし、理解し、交わることのできない人間に、グローバルもへったくれもあつたものではないのです。

顔と顔の見える関係～グローバルな神

素朴に考えてみて、私には、「民族」とか「人種」といった特定の属性による社会的集団（ある意味で抽象的な存在）を、私たち人間がほんとうに丸ごと憎むことができるものなのかどうか、よく分かりません。在日韓国・朝鮮人の人びとと言っても、実際にはとても漠然としたあやふやな概念にとどまるように思うからです。ふつう誰かを徹底して憎むと言ったら、その相手に対してそれなりの（たとえ偏見であろうと）知識や認識があつて然るべきだろうと思うのです。しかしまた逆に考えてみると、そういう抽象的な存在、観念的な相手だからこそ、そこまで極端な「憎悪表現」、ハイトスピーチをすることができるのかもしれないとも思います。

ヒトラーの時代のドイツで国を挙げてユダヤ人差別が行われていたとき、「確かにユダヤ人は全員どうしようもない奴らばかりだ。でも自分の家の隣に住んでいるユダヤ人だけは悪い人ではない」と考えていたドイツ人もけっこういたという話を聞いたことがあります。身近な人間関係のなかで知っている人、顔と顔を合わせて知っている人に向かって、私たちはそう簡単に「死ね」とか「ゴキブリ」などと罵倒することはできないのではないのでしょうか。

「知る」ということは、歴史的な知識に関しても重要ですが、とりわけ人間と人間の間では大切な意味をもっています。私たちが「知る」のは、「在日の朝鮮・韓国人」という抽象的な存在ではなく、「今ここにいる特定の人格をもった人」なのです。私たちは「アメリカ人」や「中国人」と友だちになるのではなく、「今そこにいる〇〇さん」と友だちになるのです。

日本社会に限りませんが、現在の世界は、いろいろな意味で、行き詰まり、閉塞感、無力感といったものに取り囲まれているようなところがあります。努力しても必ずしも報いがなく、時代の先が見えない、安定した生活設計ができない、確かな人間関係が築けない等々、誰もが不安で、余裕がなく、いらいらしており、やり場のない不満や怒りを抱えているところがあるように感じます。

今日取りあげたハイトスピーチ、差別や暴力の背後にも、何かそうした大きな不平不満が横たわっているように思われてなりません。寛容さを失った社会は危険です。そうした社会の怒りや憎しみの矛先は、一歩間違えば、次々に方向を変えていろいろな人びとに対して爆発し、ついには私たち自身にも襲いかかってくることもあるからです。

こういう事態をどのようにして克服していったらいいのか。そこにはひじょうに難しい問題が積み重なり、絡み合っています。しかし少なくとも私たちにはできることがいくつかあることも事実です。それはたとえば、歴史や社会に関して多面的なものの見方を学ぶことであり、できるだけいろいろな人びとと顔と顔を合わせて交わる経験を広く深く培っていくことです。

今日読んでいただいた聖書は、もともと他の民族に対しては距離を取り、軽蔑感さえ抱いていたユダヤ人の一人であるペトロという人物が主人公です。このペトロが神の不思議な導

きによって一人の外国人と出会い、新たな人間観、価値観に遭遇するという物語がそこに描かれています。

「あなたがたもご存じのとおり、ユダヤ人が外国人と交際したり、外国人を訪問したりすることは、律法で禁じられています。けれども、神はわたしに、どんな人をも清くない者とか、汚れている者とか言ってはならないと、お示しになりました。」（使徒言行録10章28節）

ペトロはコルネリウスという人に顔と顔を合わせて出会うことによって、ユダヤ人と外国人の隔ての壁を乗り越えました。そのようにペトロを導いたのは神であつたと聖書は語ります。聖書の神は、差別や暴力やヘイトスピーチの神ではなく、新しい出会いと和解、そして真の意味でグローバルな人と人との関係を作り出してくださる神なのだとすることを、これから私たちは学びたいと思います。

2013年6月12日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録